

現代の「幸福」の行くえ

葛生良一

「人の泉」代表

吉田兼好は「徒然草」に、『世はさだめなきこそいみじけれ』と記しています。兼好法師がいうように、すべてのものは変化を遂げていきますが、それにしても、今の世の中の変わり様はあまりにも急で、早過ぎるように思われます。変転、変貌、様変わりが速く、昨今この国では全てが浮き草のように見えてなりません。

街並みや山野も例外ではなく、わずかの間見ないうちに、味気ないビルに建ち変わり、木が伐採されて、山肌があらわにされ、高速道路が建設されるといった仕儀になるのです。深い山川はダムで塞ぎ止められ、川は流れを止め、海は死につつあります。

当然のように受け止めています。私たちの生活も同じように、この数十年で信じ難い変化をしてきました。次から次に新しいものが暮らしの仕方を換え、快適で便利なものが、身の回りにあふれています。古いものは惜しげもなく捨てられ、人も物も、新しいものが、束の間の価値になります。暮らしの仕方が変わるのですから当たり前で、人やものについての考え方も変わります。

以前とは全く違う生き方が始まったとしても、不思議ではありません。かつての生活の墓場の上で、やがては滅び去る、わずかな間の安逸を楽しんでいるかのような感じすらします。

生き方も変わりました。私たちの行動の基準、規範となるようなものは跡形もなく消え、当然のように、それぞれが、その場その場で、おいしいおもしろい、自由といえ自由、生き始めているというのが

現状のように思います。

経済の原則、ものを作る理屈、お金とものが生活全般を支配し、より豊かで大きいことはいいことだという大変な幸福論に、誰も抗うことができません。商品の消費が豊かさの目安なのですから、お金を得ることが最大の目標になったとしても、訝る理由にはなりません。誰しも快適な今の生活の仕方を変えることができないでいるのです。

こういう世相の中で、一人の人間の生死も変わってきました。難しいことですが、一時代前は、

人の命を軽く扱い、粗末にし過ぎたと思います。その反対に、誤解を恐れずに言えば、現在は、人の命を分に過ぎて大事にはしていまいか、そう思うのです。

子どもたちは病院で、専門家の手伝いを受けて生まれ、同じように、私たちは病室を終の住処とし、葬儀社の世

話になって逝くことを、普通で、当然のことと受け止めています。人の生死から、出来事性が失われ始め、経済活動の中に否応なしに組み込まれてしまったようです。人間の死は、多くの場合、最新式の医療器具に囲まれて、生命装置などという機械仕掛けの命を、ある時は全く意識のないまま生き続けることになります。人が生まれ死ぬのは自然ですのに、ここにも「ものを作る」ことを第一とする、近代の考えが働いているように思えてなりません。「出る」「起こる」「現われる」「成る」、人生の最も基本的な事柄を、そのまま受け取らないような、人の一生は見かけ程、豊かではない。そう考え始めています。

